

『製墨技術の変遷に関する研究』

墨は、行政や芸術を支える最も重要な文具のひとつです。

『日本書紀』によると、610年に初めて高句麗こうくりの僧曇徴どんちょうが日本に製墨技術を伝えたとされています。一方、福岡県の三雲みくも・井原遺跡いώρα、島根県の田和山遺跡たわやまなどでは弥生時代の硯すずりが出土しており、弥生時代から墨がすでに使用されていました。

墨には採煙方法や材料の違いから、松煙墨しょうえんぼくと油煙墨ゆえんぼくの2種類があります。日本に初めて伝えられたのは松煙墨で、中世に油煙墨の製造方法が伝わります。しかし、製墨技術の変化は、油煙墨生産の開始時期も含めて明確になっていません。

墨の煤粒子すすは、30nm～300nm（1nm=1/1,000,000mm）と微細であるため、SEM（走査型電子顕微鏡そうさがた）による観察がおこなわれています。墨色は、粒子の大小によって変化し、細かなればなるほど、黒く光沢を帯びます。

本研究では、SEMを用いて、遺跡から出土した墨書土器ぼくしよや硯に付着した墨の煤粒子を観察しました。その大きさや形状から、製墨方法や墨品質の差異を明らかにし、各遺跡における墨使用の実態を明らかにしました。